

# 平成 26 年度第 2 回小学校ゼミナール記録

2014 年 5 月 16 日 (金)

於：広島大学附属小学校

司会：影山和也 (広島大学准教授)

参加者：大滝 (発表者) 他 15 名

## 1. 検討論文

Heyd-Metzuyanim, E. (2013). The co-construction of 'learning difficulties' in Mathematics:

Teacher-student interactions and their role in the development of a 'disabled' mathematical identity. *Educational Studies in Mathematics*, 82(1), 341-368.

数学における学習困難の共同構成：教師と生徒の相互作用と「障害的な」数学的本人性の発達におけるその役割

## 2. ゼミナールの内容

### 2.2.1 節 学習における情意現象を研究するためのコモグニション論的ツール

個人の位置(*place*)を研究するための最も一般的な概念は、本人性である。これは Sfard & Prusak(2005)により「ストーリーの集合」,より詳細に言えば「具象化しており,承認可能で,重大である(*significant*)個人についてのコレクション」として定義されている。

また, Sfard & Prusak(2005)を基盤にしなが, 話手人物<sub>関手</sub>(Author Subject Audience)の三つ組みを用いて本人化という概念の不明瞭さを処理する。 $A_A B$ 型の発言は,一人称本人化, $B A C$ 型の発言は三人称本人化, $B A A$ 型の発言は二人称本人化である。

さらに, Sfard & Prusak(2005)は, もう一つの有効な, 本人性・ストーリーの型の区別を作った。第一の型は現状(*current*)本人性であり, 第二の型は指向(*designated*)本人性である。

### 2.2.2 節 話(*talk*)から本人化活動を取り上げる

本人化活動を捉えるために生徒のディスコースを数学化(*mathematizing*)と人物化(*subjectifying*)という 2 つの主要なカテゴリーに分ける。そして, この本人化活動を観察するために直接的本人化の 3 つのレベル分けを行った。第一は特定レベルであり, 第二はディスコースにおける個人の参加の一般的な評価を含み, 第三は定義による本人化である。

### 2.2.3 節 暗黙的本人化と間接的本人化

個人について特に語っているわけではないにも関わらず, 彼(女)に関する重要なメッセージを含んでいる発言を示すために暗黙的本人化と間接的本人化という用語を使用する。

### 2.2.4 節 相互作用ルーチン

Dana を含む四人の数学達成度の低い生徒との相互作用ルーチンにおいて社会的規範, 社会数学的規範, 数学的ルーチンというカテゴリーとは異なるルーチンを明確化する(*articulate*)する必要性に出くわした。

今回は 2.2.1 節から 3 節の直前まで読み進んだ。第 3 節に入るまでの本研究の目的と方法の説明および先行研究のレビューに関わる部分を読み進めたため, 前回と同様にゼミナール中の議論は内容確認や定義に関するものがほとんどとなった。

(文責：山田 大希)